週刊ダイヤモンド　今週の一冊

北村行伸

平成 17 年7月19日号

「地図に仕える者たち」

アンドレア・バレット（著）、田中敦子（訳）
DHC　2004年9月17日刊

本書は2001年にオー・ヘンリー賞を受賞した「地図に仕える者たち」を中心に、何らかの意味で科学にたずさわっている人々の生活や考え方を静謐なタッチで描いた短篇集である。

短篇小説には紙幅の制約があり、時代や環境の設定によって読者を一気に別世界に引き込む工夫が必要である。ストーリー展開も波瀾万丈という訳にはいかず、人生の一側面を切り取ったものになる。しかも、読み終わって確実にメッセージが伝わることが望ましい。このような制約の中で独特の世界を見せてくれるのが優れた短篇小説であり、本書はその見本といってもいいだろう。

また本書の６篇の小説の中の登場人物はどこかで繋がっており、実際に活躍した科学者が登場することで、全体として100年以上の現実の歴史の流れに対応した長篇小説にもなっている。これは『人間喜劇』でバルザックが用いた手法と同じものである。短篇小説の技法としても完成度が高い。

タイトル作の「地図に仕える者たち」は19世紀後半にインド北部の山岳地帯に分け入って測量と地図製作にたずさわる若いイギリス人技師の物語である。この状況設定によって、19世紀には世界中に未踏のフロンティアが残っており、それを果敢に調査したイギリス人の博物学的関心が高まっていた時代に一気に読者は引き込まれる。その上、主人公が下積みの技師であることも重要である。著者は、社会経済的な成功や権力欲ではなく、植物、化石、昆虫、地理といった、誰もが子供の頃には持っている純粋な知的好奇心を持ち続けて、膨大な知的財産の蓄積に貢献した人々、あるいはそれを支えた下積みの人々の人生を評価している。

本書全体を通しても、主人公は大成功を収めるわけでもなく、歴史に名を残すわけでもない。しかし、各自の人生を振り返った時に、数々の困難はあったとしても、ささやかな幸せを感じとれる人々とその生き方を繰り返し描いている。この科学者に対する暖かい眼差しとそれを取り囲む自然への憧憬が、本書の普遍的なメッセージとなっている。